

モノトーンによる表現の可能性Ⅱ

金 藤 完三郎

I. はじめに

「福岡女学院大学紀要」第12号で「人は、平面的造形行為をする上で、点と線をその出発点とするのであり、面は二次的産物であると私は考えている」と述べたが、本稿では同じ考えのもとで、さらにイマジネーション刺激力の広がる可能性を試みた実験的作品群について、考察を進めてみる。

本稿に掲載している実験的作品群（M-2）では、引き続き線描表現に的を絞り、それらがイマジネーション刺激におよぼす根源的な力を明快にするため、線描材料と色材についてその種類をできるだけ制限している。また、これらのことはモノトーンによる表現の可能性というもうひとつのテーマを誘発し、「形」と「色」という言葉で一般に表されている平面造形表現の二大構成要素について、対極の視点からその本質を追求する足場を築くものである。

作品制作にあたり実際に使用した主材料は、前出の紀要内容に引き続き、線描ではホルダー芯、色材では線描を意識した色鉛筆である。消し具についても引き続き使用を制限している。

II. 制作のコンセプト

どこかで見たことのある「カタチ」、心に残っているその遠くて小さな痕

跡。人の思い出として再び思い起こせるのは、その時身体に入って来た「形・色・感触・状況」から、心のフィルターを通して濾過された僅かな痕跡だけのように感じている。

日常のなかで陰に隠れてしまう、数え切れないイメージの世界がある。巨る空気、聞こえる音、肌に触れる感触、それらの感覚は時間の蓄積と共に記憶の中心にある筈の視覚イメージと混ざり合い、心に薄く層を重ねている。

人のイメージは変わり易く、物質の存在は強固であると誰もが思い込んでいる。だが本当にそうだろうか？空間に存在しているものが出している瓦解の音を感じとる瞬間はなかっただろうか。絶え間なく増殖している錆、軋(きし)み、亀裂、そして老化を止めることはできない。人のなかに入り込んだイメージは、その場のすべてを呑み込んでいて、時間をかけて余分な鱗を削り取っていく。そして不変で大切なものだけが琥珀のように固まっていく。

例えばひとり山の中にあり、風に靡く樹々を感じていると、風の音の中に混じって、どんどん変化し成長している樹木が発する生身の息を感じる。そして、そこにも音がある。樹幹が擦れあう音、葉の落ちる音。

「着陸地点」－前回実験作品群 (M-1) 発表時趣旨文－から半歩先の未知の世界に足を踏み入れてみる。緊張がはしる。無数の線のなかの、ただ1本の線がすべてを消し去ることもある。自己制御ができるはずの筆圧との闘い。

線のベクトル、重なり、表情そして偶然、どこまで変化し続けるのか。そして、モノトーンの世界から色を捕らえ直してみる。微かに聴こえる色の声があった。

現実の世界をトリガーにして、自分の中にいつのまにか存在しているイメージの世界を、おもての見える世界に定着できる方法を捜し求めてきた。どんなに強いもの、どんなに酷いこと、どんな圧倒的な存在のものであっても、心に取り込まれたあと、時間の力によってその姿を変える。

白と黒のモノトーンの世界、鉛筆芯から引き出される数限りない直線が、見ている人に押し寄せるのではなく、できれば引き潮のように、「あなた」の記憶のひだに沁み込んで、僅かに薫る思い出のイメージ世界に遊ばれるこ

とを願っている。願わくばそれが、幸せなイメージでありますように。

Ⅲ. 実験作品について

現在仕上がっている全作品群の内、5点を取り上げ順次写真ページに掲載している。以下、各実験作品についての主な線描方法と結果を解説していく。

Ⅲ-1 実験作品『a』

向かって右半面は、青色の色鉛筆を部分的に集中使用している。それ以外の画面全体にはホルダー芯を主として使用した。青色を使用した理由は、ホルダー芯の黒鉛が必要以上に重なり、紙表面の凹凸を潰した結果、光線の平行反射を起こし（いわゆる「てり」と呼ばれている表面現象によって）鑑賞者に僅かな眩惑現象を引き起こすと判断したための処置である。

色鉛筆は黒鉛だけのホルダー芯より柔らかい傾向にあり、鉛筆のような硬度表示のないものがほとんどである。また、粒子が大きく粘性が強い特徴から、視覚的にも物理的にも黒鉛とは性質を異にしている。

消し具を使用しない制限下では、重なり過ぎた黒鉛の層を減算できないので、眩惑現象からの復帰方法として、より柔らかく光の乱反射を起こしやすい色鉛筆の層を加算する方法を考えた。加筆した結果は表面層が光の平行反射から乱反射に変わり眩惑現象が解決された。

作品のテーマは…動物性としての人体部分…を表現しようとしたものだが、一部に色材を使用した違和感はほとんどなく、それは黒鉛の持つ固有色に近い青色による効果と、比較的硬めの製品を選んだためと思われる。

形態として大別されているジオメトリック（幾何学的）な線とオーガニック（有機的）な線が、実はジオメトリックな線だけの集合体でも、連続的に変化する描線の集まりによって、オーガニックなうねりを持つ帯状の太い線として存在し始めることが実証された。

また、右側中央部に位置する斜め右下がりの白い帯状の形は、光を感じる

ような紙素地の高密度感を生み出している。制作者は右利きであるため、ごく自然な空白の形として、これまでも制作プロセスで存在していたと想像されるが、水平・垂直以外の角度でこのような属性を持つ形が出現したのは初めてである。

さらに、大きな4つのフォルムが縦割り房形の連続形として存在しているが、それぞれの房形に凹面と凸面の違いが表現されている。これはハッチング（平行線）層の重なる位置が微妙にずれた結果と思われる。左側中央部の渦状の形は初めての出現である。

Ⅲ-2 実験作品『B』

『A』のスケールアップ作品として3階層の構図で表現されている。テーマは…動物性と植物性の成長と完成…である。1階層右の一塊のフォルムから始まり、3階層右の大きなフォルムが完成形を表現している。

途中の成長プロセスとして4つの大きなフォルムがあるが、順位性はなく鑑賞者の判断に任せている。生物の属性であるメタモルフォーゼと突然変異がハッチングのリズム変化として、この4つのフォルムを行き来している。

『A』をさらに発展させ、3次元曲面を強くイメージさせる形が完成形として存在している。これは3次元空間のイメージ表現が目的ではなく、画面全体を通して記憶イメージが時間で変化していくさまを、風食に象徴される時間軸の要素と正確なトーン（階調）のフォルムに至る過程での表現を試みた結果である。

画面中央を縦方向の直線として貫く空白部分は、強く白いラインとして他の多くの作品にも出現する興味深い現象である。考えられる仮説は、描線が生成されるか消失する部分として必要な要素、空白部分の密度をバランス取るための視覚的重心、あるいは重力のある世界では画面に元々存在し続けようとする天地を表すラインなど、いくつか立てられるがその存在理由は現在も不明である。この作品では階層ごとの分かれ目に存在している横方向の空白部分と融合し、変化の兆しを見せている。

Ⅲ－3 実験作品『C』

『B』で述べた縦方向の白いラインが、5つの紡錘形が同じリズムで繰り返されるフォルムの中に出現している。テーマは…植物性のシャボテン…である。線描はホルダー芯を使用したショートストロークを中心に構成した。

連続的な相似形を特徴とするフラクタル図形を連想させるシャボテンの3次元フォルムを、キュビスムの手法で2次元平面に展開している。相似的な繰り返しのフォルムによって、画面を充填させているのは初めての試みである。

繰り返しのフォルムを多く存在させた結果、それまでの作品にない希薄な重力感を表現している。繰り返しの効果と、横方向に連続配置した飛び出し三角形のイメージは、それぞれを増幅させながら女性のイメージを連想させている。バロック音楽のイメージと共通性を感じることができる。

Ⅲ－4 実験作品『D』

前回（M-1）と今回（M-2）の作品群中、最大サイズの作品である。テーマは…海と島…である。『B』で述べた縦方向の白いラインがない作品である。その要素を置き換えるように横方向の同じ性質を持つラインが3本出現している。

変化し続ける海上の波は、浮遊するトーンとして画面上にジグザグ状に配置され、その位置関係が捕まえにくい構成になっている。端点（線の始点・終点）は、スロータッチダウンとスローテイクオフ（描線の接地方法）の技法を使い、曖昧さによるイメージの増幅を狙っている。

水平方向に描かれた多色色材の線形状は、色相環をイメージした配列であらゆる色を代弁する。色材層にホルダー芯の線描層を被せた結果、濡れ色の効果が出現した。

Ⅲ－5 実験作品『E』

『D』と同じサイズの作品である。テーマは…半透明膜…で、3度目の取

り組みである。この作品では、向こうの世界とこちらの世界というフレーズから受けるイメージを、境界膜の形にして表現している。

左半面には木炭が多用されている。線と線の間隔（密度）を空けることで、鑑賞者の視点が画面中央に誘導されるまでの抵抗を少なくしている。

『D』に対して、垂直方向に描かれた多色色材の線形状は、色の代弁という目的を同じくしているが、筆圧をできる限り少なくしホルダー芯の線描層を被せないことで、内側から光を発する蛍光管のような表現を可能としている。

画面サイズが大きいため、腕の振りで描ける描線に限界があり、新たな技法が必要になった。充填を進める線描の僅かなズレで、3次元を連想させる形が無意識の内に生成されていることに気づき、それを逆に画面全体に広げることで立体と平面、実像と虚像の境界を自由にし、イメージの増幅を可能とした。

IV. まとめ

展示または発表のために作品サイズを拡大するのではなく、もっと純粹に画面の発する声を聴いて、画面が必要とする大きさに耳を傾ける。今回初めてのサイズに挑戦する時、私が最も大切にしたことである。

実験的作品群は、イマジネーション刺激力をどこまで強く持てるかという答えに、まだ遠く及ばない。その状況のなか、モノトーンによる表現の可能性が道具・材料・技法を展開することで限りなく増えていく予感がしている。

何を選ぶか確率論ではなく、回り道も受入れながら自分で納得できる進め方で時間を使いたいと考えている。

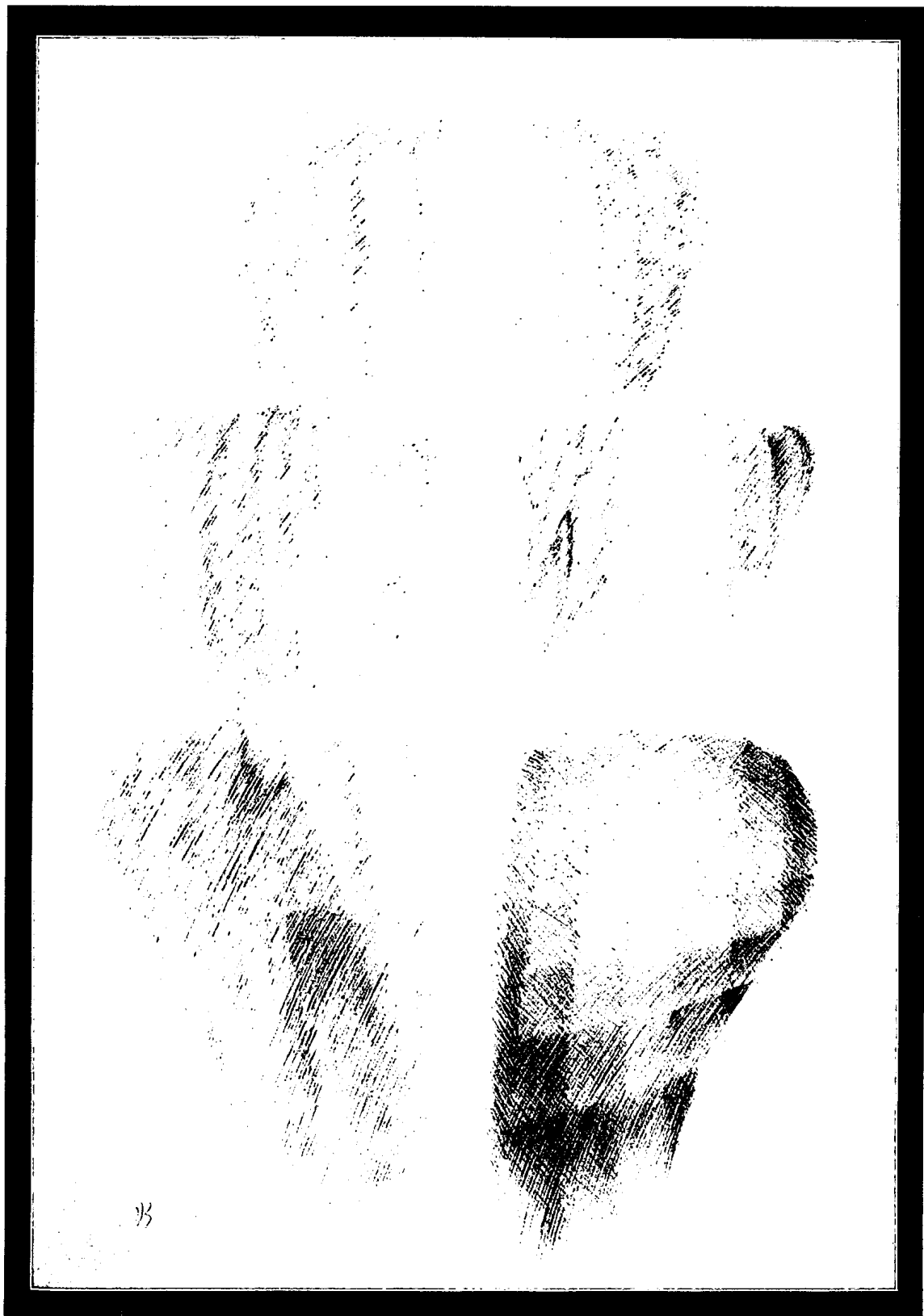
最後に、福岡女学院大学の関係諸氏ならびに、南 俊一氏にはとくに作品群制作・発表にあたって御助力をいただいた。この機会を借りて一重に感謝申し上げたい。

モノトーンによる表現の可能性Ⅱ（金藤）



〔A〕 *Color Pencil and Pencil on Watson Paper 460 mm×385 mm*

モノトーンによる表現の可能性Ⅱ (金藤)



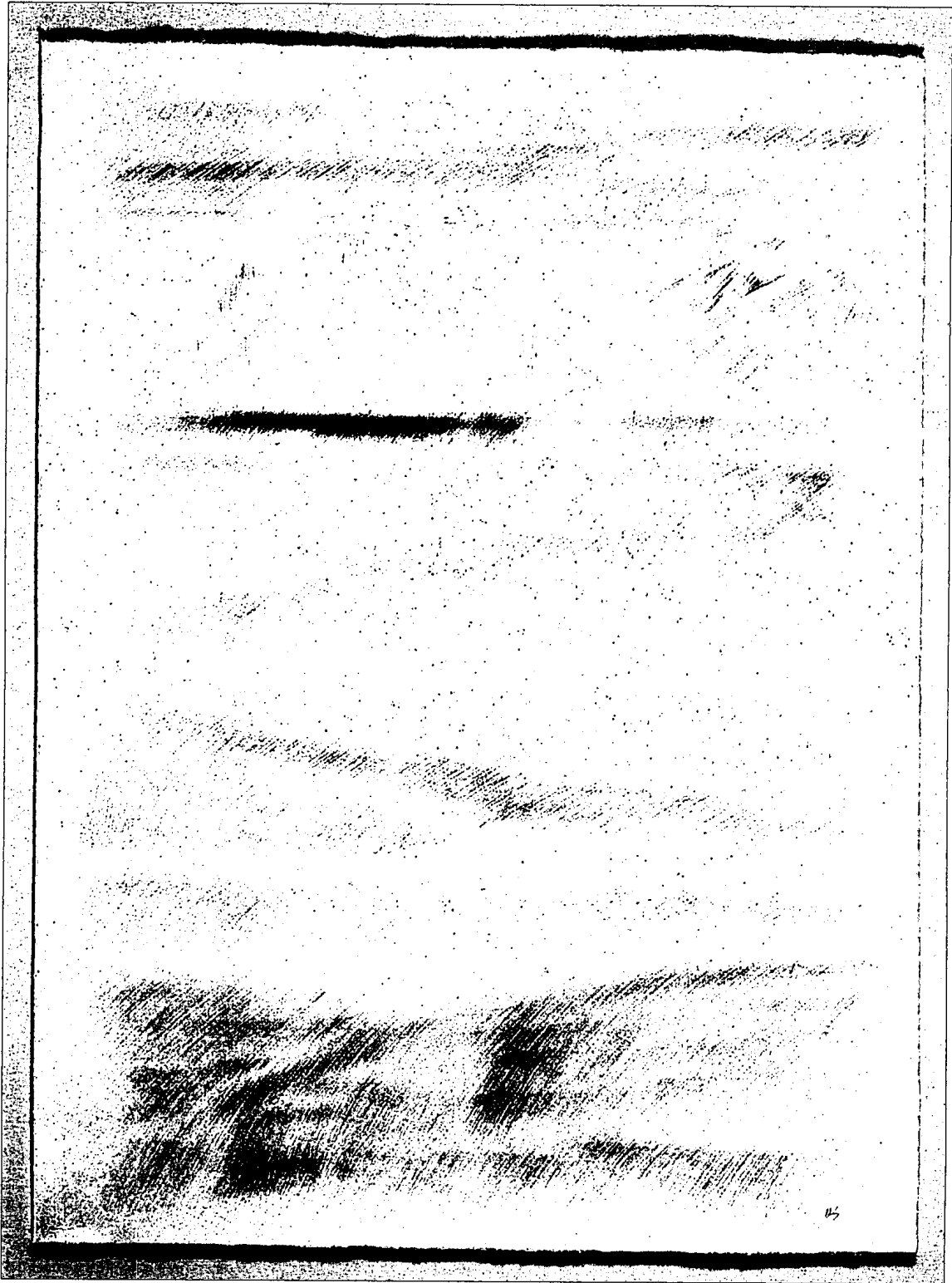
〔B〕 Pencil on Watson Paper 790 mm×547 mm

モノトーンによる表現の可能性Ⅱ（金藤）



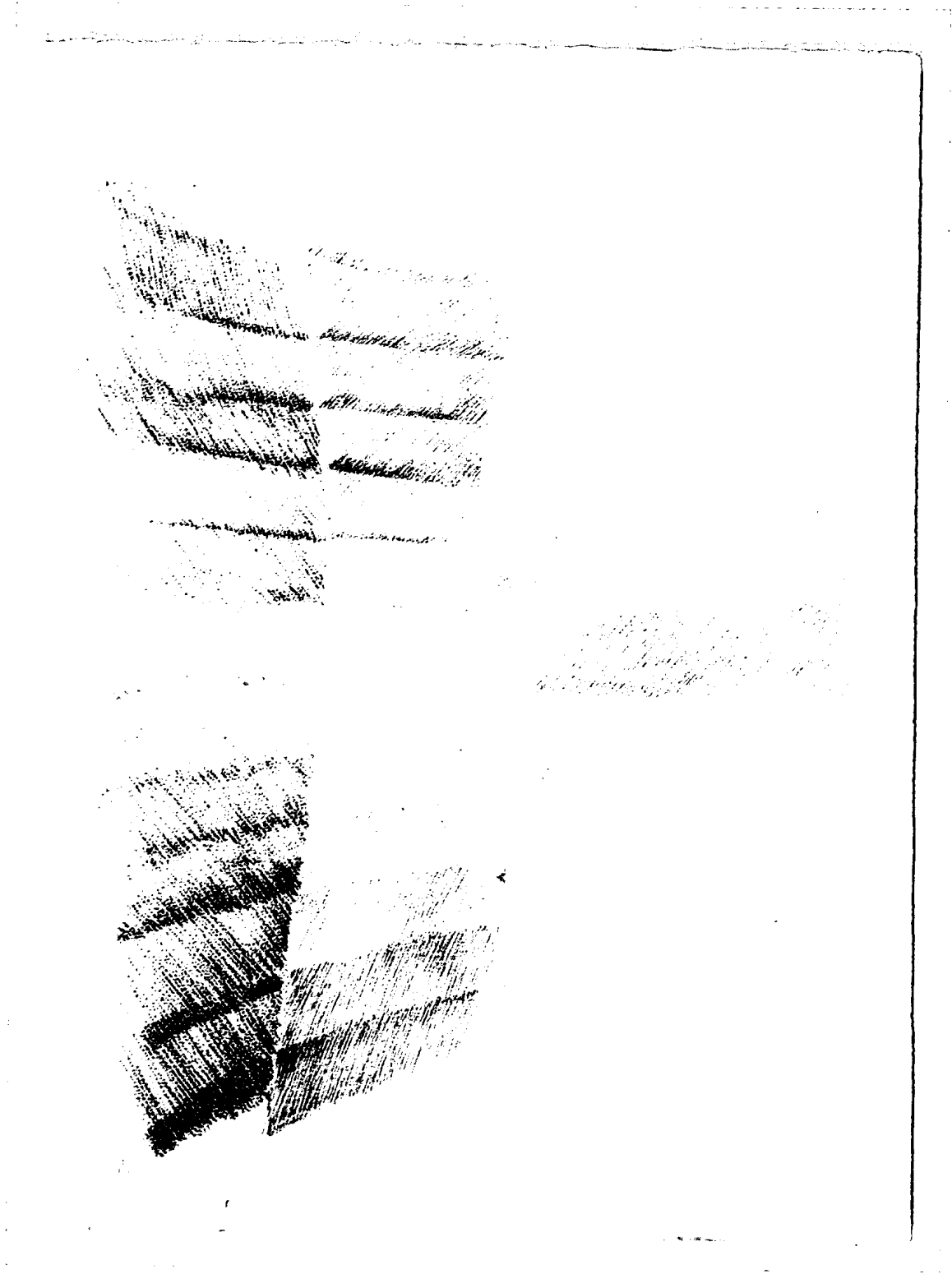
〔C〕 Pencil on Watson Paper 790 mm × 547 mm

モノトーンによる表現の可能性Ⅱ（金藤）



〔D〕 *Color Pencil and Pencil on Paper* 1075 mm × 788 mm

モノトーンによる表現の可能性Ⅱ（金藤）



『E』 Color Pencil and Pencil on Paper 1075 mm×788 mm